

災害時の生の声を聞く

当時、安八町消防団の本部長であった西松重吉さん^{しげよし}（南條在住）にお話を伺った。長良川が決壊するまさにその瞬間、現場では何が起きていたのか？



9.12 豪雨災害誌を手に、決壊時の様子を語る西松さん

9月12日の動きを教えてください。

11日の夜は、町内の各地区をパトロールしながら警戒をしていました。12日の早朝に、大森地内の長良川堤防の法面^{のりめん}（堤防の中段に当たる部分）に亀裂が入っていると連絡があり、現場に向かいました。

亀裂はどんな状態でしたか？

幅が3～5cm、深さは4～5cmぐらいの亀裂が30～50mに渡って入っていました。そして、時間が経つにつれ、亀裂が徐々に拡大していくのが分かりました。



現場での対応状況は？

亀裂の状況をより明確に確認するために、地区の住民の方にも手伝っていただき、草刈りを行いました。その後、杭打ちを行ったが、亀裂はとどまることなく広がっていきました。

決壊することは予想できたでしょうか？

それまでも、水が堤防の天面近くまでくることはありましたが、決壊したことはなかったため、まさか決壊するとは思っていませんでした。ただ、地面がずれていく時に草の根が切れて『ピシピシ』と音を立てていたのがとにかく不気味でした。そのほかにもすぐそばの池が『ガバガバ』という音を出していました。

水はすぐに町内に浸入してきたのでしょうか？

私は堤防の天面に居たのですが、その部分が舟のように崩落しました。地面がまるで地震の時のように揺れるので、立っていることもできませんでした。頭が真っ白になりましたが、すぐには水が浸入してこなかったため、這って崩れた部分から脱しました。同じく崩落に巻き込まれた人も、周りの人に助けってもらったりして何とか堤防の崩れていない部分へ避難しました。

それから一気に水が堤内に浸入したため、すぐさま対策本部へ連絡してサイレンを吹鳴してもらいました。



今、改めて災害を振り返ってみて、感じたことはありますか？

『災害はアリの一穴からでも起きる。』これはいつの時代においても変わらないと思います。どこまでいっても絶対大丈夫ということはありません。安八町は川に挟まれた地域。災害から40年たった今を契機として、水とともに生活する心構えを改めて見つめ直してみても良いのではないのでしょうか。

当時の記憶を振り返る

当時の様子を町内の皆さんに伺いました。（年齢は現在の年齢）

- ・まさか堤防が決壊するとは思ってなかったので、1階に水が浸入してきた時は、大慌てで仏壇や家具、畳などの荷物を2階まで運び上げました。（名森地区 40代男性）
- ・たくさんの方が結小學校に避難していたのを覚えています。（結地区 40代男性）
- ・水が波打ち際の波のように、白波をあげて道路を走ってくるのが分かりました。（名森地区 50代女性）
- ・寝ていたら水が背中を濡らすほど浸水していて飛び起きた。大きなたらいに子どもを乗せて、避難所まで避難したのを覚えています。（結地区 70代男性）
- ・床上浸水はしなかったが、まさかここまで水が迫ってくるとは思っていませんでした。（牧地区 80代女性）